

第三章 戦争の本質

人の生命を奪う最大の惨禍は戦争です。

この忌むべき戦争が、唯一、人為によって引き起こされることこそが、最大の悲劇でもあるのです。

史上、空前の死傷者を生じた第二次世界大戦において、辛酸をなめた筈の人類が、その後の六十五年間に、世界の各地で大小の武力戦を約一〇〇回近く（防衛白書資料抜粋計算）も生起させています。二〇〇八年八月には、ロシアがグルジアに武力介入し、世界の非難を浴びてもいるのです。

文明黎明期だった四、五〇〇年前、既に、戦争が石碑に記録されていた事実、その後世界各地で繰り返された国々の興亡、更には、第二次世界大戦後の武力戦の現状から勘案してみると、人類の今日までの歴史は、取りも直さず、戦争の繰り返しでもあったと云わざるを得ません。

人は何故、生命を賭けて戦うのでしょうか。

生まれたばかりの人間は、無防備です。

親（保護者）の救いの手がなければ、生命を保つことすらできません。

進化の過程で容量を増した脳は重く、誕生直後、発達しきっていない頸椎は、自らの力で頭部を支えることさえできないのです。

新生児（赤子）は、頭を自ら支え自由に動かすまでに約三ヶ月、二足歩行できるまでに約一年の月日を必要とします。周囲の危険を自ら察知し、回避行動

ができるまでに、少なくとも六、七年の模倣訓練期間を要すると云われます。

赤子からの数年間は、保護者の庇護が必要なのです。

また、特に、この期間における心（精神）の発達が、その人間の一生に大きく影響するとの心理学上の研究結果を、無視することはできません。

米国のポール・マクリーンが発表した「脳の三重構造」の仮説を、更に発展させた近代の脳科学は、母の胎内で形成される脳が、古脳と新脳に分かれています。これを明らかにしています。

この研究成果によれば、古脳（爬虫類脳と原始哺乳類脳との二区分）には、個体の生命維持と種族保存とに係わるDNAが組み込まれており、その中には、生き延びるために必須の攻撃本能が含まれるのです。

他方、誕生時には、真っ白で無垢そのものの新脳（新哺乳類脳）は、成長に伴う学習能力と環境や社会への適応行動を統御するのだと云われています。

古脳が人類進化の歴史を刻み込んで遺伝するのに対し、新脳は、遺伝の影響を受けずに「零」からの出発、即ち、出生後の経験を積み重ねることによってのみ発達する事実には、着目しなければなりません。

新脳の「真っさら」な細胞は、周りを囲む人間の言動を映しながら、日進月歩の勢いで急速に発達します。この新脳の記憶は日々蓄積され、人としての心（精神）を育むと云われるのです。赤子の心は、やがて、乳幼児期の間には自我に目覚めるまでに成長します。

この自我の目覚めこそが、仏国の哲学者ルネ・デカルトが感想した「われ思う、ゆえに我あり」、正しく、生物界に君臨する人間だけに許される「思考」の開始なのです。

これは、自己主張の初めでもあります。

偽ることを知らない乳幼児の自己主張は、心の動きそのままに行動として現れます。生物の個体として、本能そのままの欲望を行動に示すのです。

この本能の発露はつろとしての自己主張行動が行過ぎた場合には、周りの保護者によって、最低守らなければならない人間社会の規範に従うよう修正教化されま  
す。人として、人の群社会むれの中で生きてゆくためのルールを、成長の過程で修  
得させられるのです。

乳幼児は、自己の欲望を抑圧する教化に対して、反抗を試みながら群れの中  
で生きる術すべ、言い換えるならば、初歩的な「理性」を学習します。

二足歩行を果たし、言葉を話せる頃には、自己主張の行動限界を見極める努  
力さえするのです。保護者の顔色を窺うかがいながら意図的に試みる、最初の反抗が  
それです。

誕生直後は無防備だった人間も、人によって人としての生き方を教化されな  
がら、少しずつ歳を重ね、二〇歳前後で心身ともに独り立ちできる時期を迎え  
ます。歳を重ねるこの期間には、義務的な教育を受けたりもします。古代から  
先人が積み重ねてきた多岐たきに亘わたる経験の術すべを、手際よく分類・整理した教科書  
を活用して、基礎的な共通の知識を修得するのです。これら教養としての知識  
は、人間社会で生きるために、自ら判断する拠所よつしよとなるのです。

仏国の数学者であり思想家でもあるブレイズ・パスカルは、その遺稿「パン  
セ」の中で、「人間は考える葦あしである」と述懐じゆっかいしましたが、一人では弱い人間も、  
先人から受け継いだ知識をベースに「考える」ことによって、共同体である社  
会の中での生き方、更には、生活そのものを向上させる智慧を生み出してきた  
した。

これらの智慧は、人間社会を共存・共栄可能なものとする文明や文化を、次々  
に創造したのです。

理想的な人間社会のモデルであれば、社会を構成する個人は、培つちかった理性で  
我欲がよくをコントロールしながら、他人との共存もとの下、自他共に生かすための幸福

を追求するのでしょうか。そこでは、他人と争い、戦い傷つける事態は起こらない筈はずです。

しかし、人間社会の実情はこの理想から程遠いものになっています。

小は殺人犯罪から、大は戦争に至るまで、他人を殺める行為あやがこの地上から消え去らないのです。

何故でしょうか？

最大の理由は、人の生い立ちうまれが一樣では無いからなのです。

人間の一生に多大の影響を及ぼす乳幼児期の心（精神）の形成過程が、一人ひとり異なるからです。

二〇〇九年に六八億二、〇〇〇万人を突破したと推定（総務省統計局資料）される人類は、地球上、千差万別せんさばんべつの環境の下で乳幼児期を過もしてしています。

二〇一〇年二月現在、世界には一九三（我が国未承認の北朝鮮を除く）：外務省資料（）の独立国家が存在しますが、夫々の国は、位置する地勢ちせいに応じて、その生活環境が大きく違っています。

たとえば、国別の経済力を比較すると、一人当たりのGNI（国民総所得）の最大格差は、第一位のノルウェーの八万六、四四〇米ドル（以下「米」略）に対して、最下位のブルンジ共和国が一五〇ドルであり、その比は実に五七六対一になるのです。

一人当たりのGNIが一、〇〇〇ドル（一日当たり二・七ドル。約二百五十円）未満の国は世界中で四〇ヶ国あり、この内、アフリカ地域が二九ヶ国（占有率七三%）、アジア地域が五ヶ国（同一三%）、中東地域、ヨーロッパ地域が夫々二ヶ国（同五%）、大洋州地域、北中南米地域が夫々一ヶ国（同、各二%）です。地域別での割合を比較すると、アフリカ地域（構成五三ヶ国）の五五%、アジア地域（構成二二ヶ国）の二三%に相当する国々が一、〇〇〇ドル未満の経済状態です。

（二〇〇九年世界銀行資料抜粋）

一人当たりの生活費が一日二・七ドル(約二百五十円)以下の国民にとって、日々の生活は、生き延びるための食糧確保が最優先され、子供の学校教育が疎かにされがちです。

特に、GNI一、〇〇〇ドル未満の国々の中には、一人当たりの生活費が一ドル(GNIで三六五ドル)以下の国家が、アフリカ地域で十一ヶ国(資料が欠落している無政府状態のソマリアを含む)、中東で一ヶ国(アフガニスタン)存在しており、このような極貧の環境においては生きるだけが精一杯で、子供達は六、七歳の就学時期を迎えても、家族労働力の一員として生活を支えるために通学できないのです。

こうして、GNIの低い貧困国家では、初等教育すら受けられない児童が数多く派生しています。未就学では、当然ながら文盲を余儀なくされるのです。

文盲だと読み書きができないために、入手できる情報量も自然に限定されるようになり、また、正しい判断力を養うことが難しくなります。

文盲が多い国は当然ながら識字率が低下します。

識字率が五〇%未満の国家は、アジア地域で四ヶ国、中東地域で一ヶ国、アフリカ地域では、調査済みで十一ヶ国、調査不明ながら識字率が低いと推定されるものが十二ヶ国存在しますが、この国々の中には、GNIの低い貧困国家が符合して重なるのです。